

心や(こころ)みち

…被災地支援情報…

第78号 発行日 2004.2.27
被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel : 078-574-0701 fax : 078-574-0702
URL <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>
e-mail ngo@pure.ne.jp
口座番号 : 01180-6-68556 (郵便振替)

阪神・淡路大震災から10年目を迎えて

被災地NGO協働センター代表 村井雅清

あの日から、今年で丸9年を終えました。しかし私たちは、昨年の4月頃から「震災10年」という節目をどう迎えるか、あるいはどう捉えるか、という議論を始めています。従って今年の1月17日は、9年を終えたという一方で「プレ10年」という色彩の濃い「1・17」になるだろうと予測しました。ところが「もう10年目のネタはないよ!」というくらい、実際に多様な「各々の1・17」が展開され、「10年目って、寂しくなるのかなあ?」と思ったほどでした。

小・中学生の「忘れない」取り組み

多様な「1・17」の中で私が最も記憶に止めたのは、被災地内の小・中学生などの「震災を忘れない」取り組みです。小学生となると、当時のことを直接は知らないという子どもたちが多い。にもかかわらず、この日は「震災を忘れない」一日を共有しているのです。神戸市中央区の港島小学校では、講師を招聘して関連の話を聞いた後、あの日以来「しあわせはこべるよう」(作詞・作曲 白井真)というすばらしい歌を歌い続けています。また西区の市立櫛谷中学校では、あの日以来1月17日には、PTAの方々が「豚汁」をつくり、寒い校庭で先生も生徒も一緒にになって「豚汁」を食べるそうです。また同じく西区の市立桜が丘中学校では、地域の自主防災活動をしておられる高齢者に、中学生が話を聞き、「稻むらの火」を紙芝居にして文化祭で発表をしました。1月になってから17日までの関連の新聞記事を見ていますと、実に様々な取り組みが紹介されていました。

語り継いできたことの継承

一方、県外の取り組みに目に向けるとどうでしょうか?

各地で展開された追悼と鎮魂の灯り行事だけではなく、防災訓練あり、シンポジウムあり、こちらも多彩な取り組みが展開されたようです。

あの日以来、私たちは「震災の経験と教訓を語り継ぐ」ことの大切さを繰り返し強調してきたのです。こうして「語り継いできたこと」は、確実に被災地KOBEの文化となり継承されていくでしょう。

「する側」の論理から「される側」の論理へ
でも、自戒の念も踏まえ敢えて苦言を呈します。それは「一方通行の発信にならないだろうか?」ということです。

ボランティア元年があったとすると、今年でボランティア10年目に入ったことになります。でもこの9年間ボランティア「する側」の立場や論理だけで考え方行動してきたのではないでしょうか?ボランティア「される側」の立場や論理はどうだったのでしょうか?

今、立ち止まって足下の身近なことから、国際社会の問題までこの「される側」の論理で考え方行動しなければならないのではないかでしょうか?

例えば今、日本ではイラクへの自衛隊派遣を巡って世論が二分しています。果たして現地に住むイラクの人たちの想いや心情を尊重して送り出しているでしょうか?そもそも日本政府は、アメリカ・ブッシュ政権のイラク侵攻政策を支持する形での「自衛隊派遣」となっています。アメリカ軍は、イラク国民に求められ、歓迎されてイラクに駐留しているのでしょうか?

何か身の回りで起こることのすべてがおかしいようです。歯車の歯がボロボロになり、まったく噛み合ってないように思うのです。何故なのでしょうか?

イラン地震の被災地から

みなさんもご存じのように昨年12月26日イラン南東部で大地震が発生しました。死者4万人を超える被害となりました。この被災地バムは、なんと人口の3分の1近くが亡くなっています。壊れた住宅は、日干しレンガを積み上げ、寒暖を遮断す

るために土を塗っただけの典型的な「アドベ住宅」です。イランはもともと地震の多い国です。にもかかわらずどうして手当ができなかつのでしょうか?ホントに悔しいことです。2001年の1月にもインド・グジャラートで大地震があり、やはり同じく「アドベ住宅」の構造がほとんどで18,000人が亡くなりました。

震災の「何を」忘れないのか

KOBEの経験と教訓は、国内外に向けて発信していた筈です。「被災地責任」はどうなったのでしょうか?支えあいはどうなったのでしょうか?

こんな悲劇は、もう繰り返してはなりません。私たちは、この9年間「震災を忘れない」を合い言葉のようにしてさまざまな取り組みをしてきました。でも何か大事なことを忘れてきたのではないでしょか?

あの時亡くなった人の8割から9割は、建物倒壊による圧死と言われています。そうです。建物が壊れたら命は助からないのです。イランの被災者が言いました。

「地震で亡くなったのではない。建物に殺されたんだ!」と。

みなさん!今一度自分の住んでいるところが安全か確認してみませんか?

「智恵の技術」ということ

もう一度、1995年1月17日を思い出しましょう。あの時は、世界中の人々が「いっとき」でも、最後の一人までもが助かることを願ったのです。たった一人でも大切にすることを体感しました。同時に、

「人間は一人では生きていけない」という至極当たり前のことに気づいたのです。私たちは、人と人、あるいは人と自然、支えあって生きているのです。支えあうことから自律が生まれることも知りました。もう一つ支えあいから知る必要があります。それは「学びあい」だと思います。「智恵の技術」とも言えましょうか。

被災地
の現場
から

イラン南東部地震支援について

(イラン・ケルマン州バム市)

CODE 海外災害援助市民センター 斎藤容子

昨年暮れの12月26日、イラン南東部のケルマン州バム市と周辺村の人口約12万人の地域を突如、地震が襲った。死者が5000人以上とも2万人以上とも言われ、情報の錯綜するなか、CODEでも情報収集が開始された。そして、急遽1月1日より派遣が決定し、1月1日の夜中、新年を祝う日本から悲しみのまっただ中にあるイランへと飛び立つこととなった。

これまでアフガニスタンに2度入った経験はあったものの、災害直後の現場へ初めて入った私は、正直不安でいっぱいだった。私に何ができるのか。全く見えない状況の中、CODE理事でもある被災地NGO協働センター村井代表と現場に向かうことになった。しかし、テヘランまであと10分のところで雪で空港が閉鎖されたと、飛行機がドバイへと引き返す羽目となった。

そこから2日間、飛行機は飛ばず、気持ちばかりが焦りを増す中、2日目の朝やっと、テヘラン行きが飛び立った。テヘランへ到着後、すぐに国内線へと乗り換え被災地バムがあるケルマン州まで飛んだ。翌日、いよいよケルマンからバムへと車を走らせる。ケルマン市からバムまでは、幹線道路1本が砂漠の中にしかれている。



壊滅したバム市街 (CODE撮影)



バムは、もともと砂漠の中に出現したオアシス都市だった。バム直前に川が流れている。橋を越えるとバム周辺村に入る、と教えてもらった瞬間からテントが突如現れた。そしてどんどんと赤新月社のマークの入ったテントが道路上に並べられている光景が増えてくる。そしてその後ろには瓦礫となった家の残骸が散乱している。そして、バム市内へと完全に入ってしまうと、そこはあまりにもの非日常世界があった。瓦礫の山としか表現のしようのない町であった。どのような風景があったか、どこに家が建っていたのかさえも、想像できないほどにひどい状態だった。

私たちの案内役としてテヘランから入ってくれたテヘランの大学に通う学生さんは、両親のふるさとがここバムだった。そのため親

類の多くがここに未だに住んでいた。そして、その多くが今回の地震で亡くなった。私たちを生き残った親類の方のテントへと案内してくれた。叔父さん、叔母さんは彼の顔を見た途端に泣き崩れた。息子、娘、そして孫2人が犠牲となった。叔母さんは地震が起る直前、朝のお祈りのために起きていたという。そして地震が起った瞬間に外へ飛び出した。そして後ろを振り向いた瞬間、そこに有るはずの家が崩れていた。中にはまだ娘も息子も孫もいた。彼女は何もすることができます、ただ頭を抱えて泣くことができなかったという。

地震はすべてを一瞬にして奪い去った。私は正直、何をしにここまできたのかわからなくなってしまった。泣いている彼女を前にして何も言

えず、慰めの言葉さえも見つからなかった。彼女たちは、自分たちのいた家の跡地に連れていってくれた。そこには数日前までは当たり前のように家族の生活があったことを匂わせる物が、形を変え転がっていた。扇風機にテレビ、そして教科書。

私たちは、そこから少し離れたもう一つの被災地であるバラバット村を訪れた。ここはバム市から車で15分ほど走ったところにある。この被害もひどい。村に入ると、道路の中央分離帯には一列のテントが張り巡らせてある。またその脇の道路にももちろんテントの列がある。この村もほとんどが全壊状態にあるという。私たちはこの村の自治会メンバーにお会いし、状況をお聞きすることができた。そして、その中の一人の方の案内によってこの村を見て回った。

そこで、この地域にあるカナートと呼ばれる地下水路を見せてもらった。この地下水路は中東では伝統的なもので、アフガニスタンではカレーズと呼ぶ横型井戸である。この地下水脈はこの地域一帯の主要産業であるナツメヤシの生産にかかせない水となっている。しかし、私たちが見た2本のカナートには水がきいていない。地元の人間に聞くと

地震前は水はなみなみと流れていたという。地震以後、どこかが破損したか、水脈が変わったかで水が流れなくなってしまったという。この地下水路を修復しない限り、この地域の経済活動の再建はなりたたないだろう。

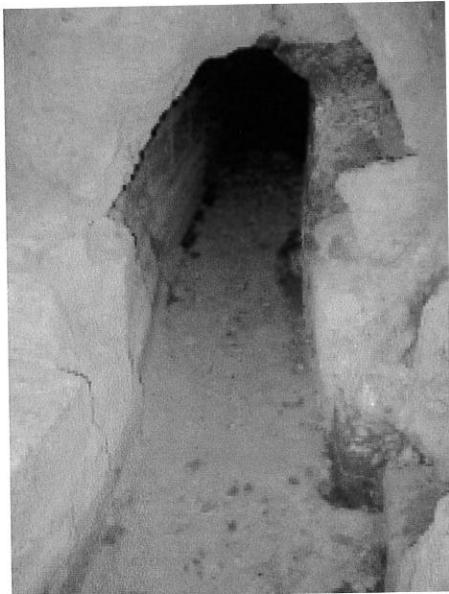


親族を失った女性 くらしの道筋は険しい (CODE撮影)

夜になり、ケルマンへと戻らなければならなくなってきたので、バム市内へと戻り、昼間に訪問させていただいた叔父さん、叔母さんのテントへともう一度伺わせていただいた。市内への帰り道、テントからはうっすらと豆電球の明かりが漏れていた。気温が随分昼間に比べると下がってくる。人々がテントの外でたき火をしている姿が目に入る。叔父さん、叔母さん一族のテントも同様外でたき火がされていた。私たちが訪ねると快く、お茶を飲んでいいと誘ってくれた。生き残った親族が肩を寄せ合い甘い紅茶を飲んでいた。私たちもその輪の中に入りていただき、お茶をごちそうになった。

たき火の中に燃やされていたのは、窓枠だった。私は昼間同様、何も言葉ことができなくなり、ひたすら甘いお茶を飲みながら、そのたき火と、月の光を受けて、不気味な陰を映し出している瓦礫の山を見つめることしかできなかった。ただ、ここに私がいることで、もし遠い日本にも心配している人たちが沢山いるということを伝えられたらと思った。

そして、帰り際、私がようやく彼らに声をかけることができたのは、おみやげとして持っていた“まけないぞう”を渡した時だった。「決して一人だとは思わないで。この



断水したカナート (CODE撮影)

まけないぞうには日本のみんなの心配の気持ちがこもっているのだから。」と。通訳さんがまけないぞうを理解できたかはわからないが、それでも人々はありがとうと笑ってくれたところを見ると、私の言いたかったことは伝わったのだと思う。

約12万人の人口で4万人以上の死者ということは、約3分の1の人命が一瞬にして奪われたということになる。なぜこんなに簡単にも家が壊れたのか、これからどうするのか、考えなければならないことは山積している。彼ら自身が復興課程をしっかりと担い、生き残った人々で、どのような街をこれから造っていくのかが一番重要なことだろう。もう簡単に壊れたりしない街を、そしてよりよい街になることを願うばかりである。

そのためのサポートを私たちができればと思うし、また私たちも一緒に彼らと考えながら本当に豊かな街を作り出す方法を考えたいと思う。

支援金ご協力のお願い

郵便振替

口座番号：00930-0-330579

加入者名：CODE

※通信欄に「イラン地震」とご記入下さい

募金総額の15%を上限として事務局運営・管理費に充てさせて頂きます。

CODE

PEACE for ACTION

1万人のピースウォークに参加しませんか？

阪神・淡路大震災から丸9年が経ち、10年目を目前にした1月17日被災地KOBEでは、あらためて命の大切さを実感しました。この9年間、私たちは「たった一人」を大切にしてきました。

しかし、世界を見渡すといとも簡単に人の命が奪われています。昨年末のイラン地震でも4万人以上もの尊い命が亡くなりました。「地震で死んだのではない。建物によって殺された。」という指摘に頷かざるを得ない結果になってしましました。そしてパレスチナやアフガニスタンでは、未だに悲劇が繰り返されています。これらを見ると、イラクの今後は容易に想像することができるでしょう。

「フセイン政権が大量破壊兵器を持っている」ということが最大の理由で、昨年3月20日ブッシュ政権によるイラク侵攻が行われましたが、当時の調査団団長はつい先日「大量破壊兵器はなかった」と断言しています。しかし、あろうことか平和憲法を持つ日本政府は、昨年末から年明けにかけ、陸空の先遣隊をクウェートやサマワに送り、それに続き航空自衛隊の本隊を1月20日に派遣しました。

小泉首相は「イラク復興支援」と言っていますが、イラクへの自衛隊派遣は明らかに憲法違反です。その憲法違反である行為に、私たちの血税が使われているのです。国連の関係者や各国のNGOは、同じく復興支援という目的を持ってイラク各地で活躍しています。しかし、彼等・彼女等は決して「無反動砲」や「装輪装甲車」などを持っていません。

どうして日本政府は自衛隊派遣となるのでしょうか？ どうして軍服を着て、戦車や武器を持った人たちが行くのでしょうか？ フセイン政権がクルド人など大量虐殺を行ったその行為は問われなければならないでしょう。しかし、一方ブッシュ政権が何の根拠もなしに、武力を持って他国を占領するのは国際法に反する不当行為なのです。

私たちは2003年12月15日の第2回カイロ会議で呼びかけられたイラク占領反対世界統一行動に参加します。イラク攻撃開始から1年が経つ3月20日に、ここ被災地KOBEから「命の尊さ」を確認し、イラク占領反対と自衛隊派遣反対を訴えます。

「『戦争』や『テロ』への恐怖がいつそうの軍備の強化を求めるとすれば、それはさらにいっそうの恐怖を互いに引き起こすことになり、得るものは不信と恐怖であって、国民の利益ではない。」と憲法研究会の務台理作（故人）は述べています。

被災地KOBEでは1995年1月17日に5,500余名の命が奪われ、その後公表されている数字では6,433名となり、関連死を含めればもっと多くの方が亡くなっています。それから、起こるかもしれない災害に備え、防災や減災を全国・全世界に発信し続けています。にもかかわらず一方で人が人を殺すなんてあってはならないことです。それがたとえ自衛のためであっても、人を殺すということは当事者にとったらどんなに心の痛手になるか想像をはるかに超えています。繰り返してはならないのは、この悲劇です。

みなさん！ そんな悲惨なことにならないうちに、イラク占領をやめさせましょう！！ 自衛隊派遣をやめさせましょう！！ そして、NGOなどの人たちの活動を支えていきましょう！！

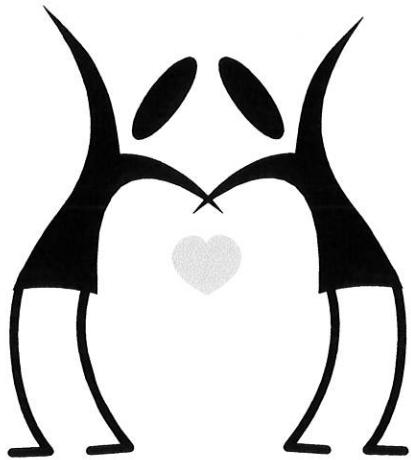
ぜひ3月20日（土）の1万人ピースウォークに参加して下さい。当日参加できない方は当日のPM3：00一緒に黙祷をして下さい。

（KOBEピース・ネット）

*文中KOBEとあるのは、広く被災地を指しておらず、神戸市という意味ではありません。ノーモア広島と同様世界に発信するために、「ノーモアKOBE」という想いがあります。

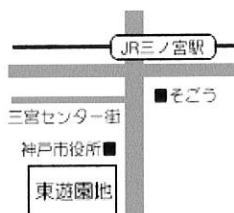
1万人のピースウォーク3.20

世界の人々とともに
イラクに平和を・・・



イラク侵攻開始日です。

日時：3月20日（土・祝）
お祭り AM 11:00～PM 2:30
ピースウォーク PM 3:00～PM 5:00
場所：東遊園地（下記地図参照）



連絡先：

KOBEピース i ネット
(被災地NGO協働センター内)
TEL078-574-0701 FAX078-574-0702
E-mail : ngo@pure.ne.jp
<http://www.kcc.zaqq.ne.jp/lovepeace/>

米英軍のイラクへの不当な占領や日本政府の自衛隊派遣に反対の意思表示をします。平和運動に取り組む人や何だか不安だけど何をしていいかわからない、私の恋人や家族がイラクへ行ったらどうしよう、という人たちが集まって、平和や反戦などについて考え、交流を深めたいと思います。

当日は、お祭りではステージ、模擬店、パネル展示、午後は沈黙の時、平和アピール、ピースウォークを企画しています。でもまだまだみなさん一人一人のお力が必要です。ぜひ賛同人やボランティアをしてください。

賛同人になって下さった方は、ピース i ネットのホームページにて公開させて頂きます。同時に協賛カンパも受付中です。ぜひ、あなたも一万人の一人になって、一緒に平和を創って行きましょう！

賛同人募集中！！

賛同人の「動」は、当日一緒に心も体も行動して下さる方を募りたいという気持ちから「賛同人」としています。

ボランティア募集中！！

憲法を考える Constitution of Japan

いま私たちにできること

国会では、「憲法を見直そう」という動きが急速度で進められようとしています。

憲法がどのように見直されようとしているか私たちは知っているでしょうか？

憲法が私たちの暮らしとどのようにかかわりがあるか考えたことがあるでしょうか？

最高法規といわれる憲法を見直すことは、この国の未来を見直すことです。私たちはそんな重要なことを決して人任せにしてはならないと思います。この国の未来を担う私たち若い世代が、しっかりとと考え、責任を持った選択をしていく必要があるのではないでしょうか。

みなさんも憲法について一緒に考え方ませんか？

講師・藤田昭彦さん
一九六四年、毎日新聞入社。
大阪本社社会部記者、広島支局長。
次長、地方部副局長、松江支局長。
アジア面担当編集委員などを歴任。
編集委員としては、主に在日外国人、アジア、人権、国際交流などをテーマに材。
アジア太平洋戦争開戦地であるマレーシア・コタバル、人民共和国（北朝鮮）、民主主義開拓する朝鮮民主主義共和国（北朝鮮）、タイなど。
カンボジア難民キャンプ、アフガニスタンの民主化指導者、アウン・サン・スー・チー、ケニアの牧畜民に対する暴力、ビルマ（ミャンマー）の民主化運動など。
日本獣医師のボランティア活動など。
リカ・ケニアの牧畜民に対する暴力、ビルマ（ミャンマー）の民主化運動など。
D書記長にもインタビュー。
二〇〇一年十一月退職。二〇〇二年四月から神戸松蔭女子大学非常勤講師（新聞学）。
近畿地方連絡会（9条連）
近畿地区未来へ
近畿地区連絡会（9条連）
近畿地区連絡会（9条連）
近畿地区連絡会（9条連）

2004年3月13日(土)
14:00～16:00

新長田勤労市民センター3階 会議室1

参加費500円（資料代として）



お問い合わせ：憲法を考える勉強会実行委員会 TEL：078-574-0701

市民セミナー
寺子屋

TERAKOYA

子どもとくらしと地域の話

まもなく震災から
10年を迎えるとしている
この被災地で、子どもの視点から、
「くらし」と「地域」を捉え、
本当に安心で安全な社会とは
何なのかを考えられる場を作りたいと
この寺子屋セミナーを開設しています。
社会福祉法人えんぴつの家の
松村敏明さんにお話を伺いました。
今回は参加者のみなさんの感想を紹介します。

松村敏明さんのお話を聞いて
く人の絆こそ力

障害者と共に辿りつつ生きる

ものごとついつい身近な内容に、入りやすかったです。

先生の話が非常に分かりやすかったので、聞いていて頭の中で、浮かんできました。

* * *

地域の中に、障害者の居場所を！

個性と個性がぶつかりあって、まざりあいながら新しいモノが生まれると思う。

自立生活のお話の中で「人に挑む」力をつけていくことを考えさせられました。

グループホームたろうに今度あそびに行きたいと思います。

* * *

何か現在進行形で話されてて、人の生きてきた人生を聞かせてもらうのは若いぼくにとってたらためになります。

「共に生きること」の意味が伝わってきてとても感動した。

障害という言葉の裏にあるものは“分ける”ことにつながる。そこから差別や偏見がある……。

反対に、地域に生きることのすばらしさも実感している。“自立”へのメッセージはとても深いと思った。いろいろな気づきがありよかったです(うまく書けませんが……)

* * *

貴重な話が聞けて良かったと思う。体験談は、他のどんな理論よりも、聞きやすく、説得力のあるものだとあらためて感じた。

もっと、個人的にいろいろ質問したくて、少し、心残りな感じもある。

地域に密着したお話で、神戸だからこそ、松村さんが居たからこそ実現したのではないかというコト。反対に、全国共通のかなあと感じたコト。本

当に、面白く、聴くことができました。

* * *

「頼める」というのは、能力ですね。手に入れるのは楽でないです。大学で学んだデザインや建築に何する知識は、

「人に何かを頼む」ということから、逃げるのを助けるのを目指す、という侧面が、あることを思い出しました。

「頼める」能力の向上と、デザインの力との共存とは? 今後の私の課題です。ありがとうございました。

* * *

私にとって今まで障害者との関わりがほとんどないなかで暮らしてきたということを松村さんの話を聞いてあらためて確認した。身近な存在としてあることが自らの関心を開くというところがあるが、いろんな関心の姿を意識して開くことで、自分事他人事という線を引かないでいたいと思った。

「助けて」と言えること、それが、人が生きていく上で大切だと改めて感じた。

* * *

講師の方の話はもちろん、参加の方々のお話も、とても良かったです。

やはり障害者問題に取り組む、立ち向かう人は、身内の方に障害者がいたり、自分がそうであったりしますね……。すごい高いモチベーションをお持ちだな、と改めて実感しました。私はその辺りがすごいネックでなかなかふみ出せないです。

でも、“自立”とは自分で何でもすることではなくて、周りに頼んで自分の生活を成り立たせることということで、目からウロコでした。私は“地域福祉”にたずさわりながら、そのような“頼み”にすぐ答えられないような『人々の心づくり』を目指して行きたいな、と思っています。

在り日のカーブル博物館

Traces: The Kabul Museum 1988 1988年



93年に破壊されたカーブル博物館。

カメラは88年当時の無傷の博物館の代表的文化財を撮影していた。

92年のアフガニスタン民主共和国の

崩壊後、その7割が破壊され

略奪され、日本をはじめ海外に流出した。

カーブル博物館の文化財の

フィルムは他にはない。

<価格(送料別)>

個人・NPO… 5,000円

教育機関・図書館など… 15,000円

土本監督のご協力により

販売益の一部が活動資金に寄付されます。

CODE海外災害援助市民センター

神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL078-578-7744

FAX078-576-3693

e-mail : info@code-jp.org

土本典昭
私家撮影
シネ・アソシエ作品
ビデオ

年末カンパのお礼

被災地NGO協働センタースタッフ一同より

12月に発行した「じゅりみち」第77号でご協力をありがとうございました。年末カンパですが、12月・1月の間にかけて、64口・396,900円のご支援を全国のみなさんより頂きました。ありがとうございました。

当センターの財政事情は依然として厳しい状況が続いているが、この1月からは一般職員給与を20%減額し(15万/月→12万/月)、活動の維持を図っています。

そのような中で、みなさまからの

ご支援は、本当にありがとうございました。励まされると同時に、貴重な思いを託して頂いていることを感じて、改めて身の引き締まる思いがいたします。改めてこの場を借りてお礼申し上げます。

なかなかしんどい状況が続いているが、元気な活動報告が出来ますよう、努力していきます。また、みなさまがたにも、今後ともより一層のご指導、ご鞭撻をお願いいたします。

第六回
安心居住の
『集住』の展開
共に住む楽しさと

第五回
震災が高齢社会の
『住まい方』に
もたらした課題

日 時 三月十九日(金)
一八時半より
講 師 塩路安紀子さん
ジオ・プランニングまち居住研究会
資料代五〇〇円(各回とも)

日 時 三月三日(木)
一八時半より
講 師 石東直子さん
コレクティブハウジング事業推進支援団
コミュニティ支援ステーション



◇会場・問合先
被災地NGO協働センター
tel: 078-574-0701
e-mail: ngo@pure.ne.jp

※この講座は「木口ひょうご地域振興財団」の支援を頂いて実施しております。

1995年の阪神・淡路大震災。あの震災はほとんど無防備といつてもいいほどこのまちを襲いました。その結果、私たちの住むこのまちが、あまりにも脆弱であることを知らされました。私たち市民・住民による「地域のガバナンス(協治)」が貧弱であることを露呈しました。震災後の取り組みから、災害にも強い、安心・安全な地域を築くにはその地域に住む市民・住民がエンパワーメントすることが大事であることに気づきました。

2000年8月からスタートした「寺子屋」は、みなさんとそのような「地域のガバナンス」の主体的な担い手づくりの「場」として育んで来ました。

今回のシリーズは、「人として」という骨太の理念を根底におきつつ、思い切り身近な「くらし」に密着した実践事例を学びます。

CODE 専門セミナー 「災害看護の取り組みの実際 ～被災後の継続的支援～」

昨年度から開催しております医療従事者の方を対象とした専門セミナーですが、今回はCODEの理事でもある黒田裕子(阪神高齢者・障害者支援ネットワーク副代表)を講師として開催いたします。

看護師として「固定チームナーシング」「看護管理」「ターミナルケア」を専門分野として、1995年の阪神・淡路大震災以後は、仮設住宅支援のボランティア活動のかたわら、同活動を通じての災害看護やボランティアのあり方、NPOについても造形が深く、活動は多岐に渡って活躍しています。

そこで今回は、「災害看護の取り組みの実際」をテーマに、学び皆様とともに考えていきたいと思います。

【日時】 2004年3月14日(日)

13:30~17:00(13:00より受付)

【会場】 あすてっぷKOBE2階セミナー室
(神戸市中央区橋通3-4-3)

【講師】 黒田裕子(CODE理事)
阪神高齢者・障害者支援ネットワーク副代表
【対象】 医療従事者及びCODE会員、一般
【受講料】 3,000円/CODE会員1,500円
(当日、受付にてお支払い下さい)

【定員】 50名 (定員になり次第
締切とさせていただきます)

CODE 記念講演会

「国際的な人道援助のあり方」 第3回「予防防災とCODEの役割」

「国際協力」「国際交流」が叫ばれる中、国連機関やNGO、その他様々な国際協力機関では、現在アフガニスタンやイラクへの支援をはじめ多くの海外の現場での人道援助のあり方が問われています。

市民の皆様と共に海外の災害救援を行うべく発足した私たちCODEは、人道援助について問われている今、本講演会を通じて「何ができるのか」そして「CODEの果たす役割」について皆様と共に考えたいと思います。

最終回の第3回は、室崎副代表を講師に「予防防災とCODEの役割」について講演していただきます。皆様の多数のご参加をお待ちしております。

【日時】 2004年3月28日(日)

13:30~16:30

【講演者】 CODE副代表理事 室崎益輝

【会場】 JICA兵庫国際センター2階

ブリーフィングルーム

【定員】 100名(定員になり次第

締切とさせていただきます)

【受講料】 2,000円/CODE会員及び学生1,500円
(当日受付にてお支払い下さい)

ぞう 通信。

第31号 2004.2.27

発行所：被災地NGO協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel: 078-511-8698 fax: 078-574-0702 http://www.pure.ne.jp/~ngo/



阪神・淡路大震災から丸9年が過ぎ、来年には10周年を迎えるとしている。1月17日は一人ひとりがそれぞれの想いをめぐらす。追悼行事に参加する人、被災地を歩く人、静かに一日を過ごす人、仕事に行く人、それぞれの過ごし方がある。

被災地の新聞やテレビなどはこぞって震災特集をくむ。目についたのは復興住宅での「孤独死」251人という数字。これは仮設住宅での「孤独死」233人を上回る数字となった。しかし、これはあくまで数字である。この瞬間にも「孤独死」の前にある「孤独な生」を生きている人々がいる。この「孤独な生」は「孤独死」に至までの過程で一人淋しく生きていることである。この9年間コミュニティや命の大切さが叫ばれているが、正直どこまでそれが現実の問題として取り組めたのかは疑問が残る。

アフガニスタンやイラクのことも同様に

自然災害や紛争などで亡くなった人たちの一人一人の命に報いることができたのか？いや、まだだろう……

先日2月18日付の朝日新聞の天声人語で「象」のことが書かれていた。

「象をめぐる神話や伝説は多いが、「象の墓場」もその一つだろう。死期を悟った象が群を離れ、墓場に向かう。無数の骨や牙が散らばる墓場に身を横たえ、静かに死を迎える。誇り高き彼らの最後にふさわしい莊重な光景だ。だが、そのような墓場はないというのが定説で、想像の産物とされる。とはい、象の死は劇的に語られることが多い。仲間の死を悲しむ姿が尋常ではないからだろう。瀕死の象を仲間は何とか助けようとする。倒れると、牙で引き起こそうとする。だめだとあきらめたら、埋葬に取りかかる。足や牙でまわりの土をふりかける。鼻で枝を集めて死骸にかぶせていく。埋葬が終わってもその場を立ち去らない。アフリカ象の生態を調べた『野生の巨象』（ハミルトン夫妻著・朝日新聞社）には、3日間も死骸を見守った例が出ている」

人間の世界はというと1日、1週間、ひと月たっても気づかれない「孤独死」が被災地だけでなく、全国でも起きている。

「まけないぞう」は「孤独死」にいたる、「孤独な生」を回避するため、そして、支え合いというコミュニティを育むための「媒体」として少なからず、被災者の人の側にいる。オーバーかも知れないが、象が瀕死の仲間を助けようとするように・・・

被災の方々の心からあの日のことは一生消えない、悲しみからたちなおるにはたくさんの時間が必要だ。あの日のことは昨日のように思い返される。丸9年を迎えた1月17日もそうだった。関東大震災、長崎・広島などの経験でも何十年も経つが、その悲しみや記憶が残っている。そして、その経験や教訓が語り継がれている。

この「ぞう通信」を受け取ったみなさんお一人おひとりが、「まけないぞう」のメッセージを通して被災地KOBEや被災者の人たちのメッセージを伝えて下さればうれしく思います。

どうぞ今年も「まけないぞう」をよろしくお願ひいたします。



リングぞう500円



親子ぞう700円

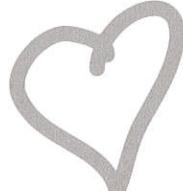


子ぞう300円



イランの被災地で

いつもあなたの
そばにいます



まけないぞう400円



アフガニスタンの
被災地で